

変わる教育委員会

《第600回》

三島村は日本の保健室①

鹿児島県・三島村教育委員会
教育長 室之園晃徳



三つの島の村「三島村」
鹿児島県薩摩半島の南端から約40キロの海に浮かぶ「竹島」「硫黄島」「黒島」。これらの小さな三つの島を合わせて三島村は構成されている。

ようこそ 離島の村へ 三島村の山海留学

その名の通り竹に覆われた竹島、活火山の硫黄岳がそびえる硫黄島、そしてうっそうたる森林の島「黒島」。全く違う表情を見せて横に並ぶこれらの島は巨大噴火の痕跡で、「三島村・鬼界カルデラジオパーク」として認定されている。

人口は約380名。交通手段は週4便の定期船のみ。村役場や教育委員会は、島内ではなく鹿児島市にあるという特殊な行

政システムが敷かれた村だ。

隔離されているが故に、独自の文化や伝統、伝説等が語り継がれているが、農漁業にしろ観光にしろ、特に主幹産業と言えぬものはないため、財政状況は厳しく人口は減少していくばかりである。この島を舞台にした『私は忘れない』（有吉佐和子著）、『忘れられた島へ』（長崎源之助著）などの小説があるが、このままでは本当に忘れられた島になってしまおうという危機感が常にあるのは否めない事実だ。

それでも今、この村を元気にしているのは学校であり子どもたちだ。人口減少の激しいこの村に4つの義務教育学校と80名の子どもたち、50名の先生たちがいる。つまりこの村の3分の1以上は教師と児童生徒ということになる。このような極端な人口比率の町村は恐らく全国どこを探してもないであろう。なぜこの厳しい状況の中で学校が存続できているのか。それは、村が長年取り組んできた山海留学のお陰である。

子どもで村が息づく

平成元年の児童生徒数は、4つの学校を合わせて42名。このままでは、遅かれ早かれ学校は閉校になるという状況に追い込まれていた。そこでこの状況を打開するために平成9年度から取り組んだのが山海留学。この24年間で児童生徒数はほぼ倍増し、平成以降最も多い。児童生徒増に伴い、教師も増えて、高齢化していた島が活気づく。まるで子どもたちに与えられた特別なパワーが大自然のエネルギーに息を吹き込むようだ。

「離島教育は教育の原点」ということをよく言われるが、島の子どもたちや山海留学生を見てみると、村は国の縮図であるというのを感じる。子どもたちの抱えている問題はつながっている。山海留学はこの国の教育課題を解決する有効な手立ての一つとなり得るのではないかと。離島教育・山海留学の実態、その効果や課題を、本シリーズを通して紹介していきたい。